

これからの住まいづくりと「北方型住宅」

北海道立寒地住宅都市研究所 居住科学部長 加藤 光夫

1 はじめに

生活に心のゆとりや豊かさが求められる時代になりました。「衣・食・住」のうち「衣」や「食」はすでに満たされましたが、この「住」についても「量から質」今日では「ゆとり、豊かさを実現する」時代であると言われていました。

近年のめまぐるしい社会変化の中で、この「質」を意味するものも大きく変わってきました。

道の新長期総合計画では21世紀を目指した住まいづくりの方向を「北方型住宅」とし、ハードな住まいづくりから北の暮らしや住まい方なども含めたソフトの視点を加えた総合的な住まいづくりを目指して各種事業を展開しています。

ここでは、北方型住宅の目指すものをこれまでの住まいづくりをふり返りながら考えてみたいと思います。

2 住宅建築の歩み

本道の住宅建設の推移を簡単にふり返ってみると表1に示すようになっています。

戦後の本道の住宅建設は引揚者のための住宅の建設やそれまでに移入されていた本州様式の住宅の寒地向改善事業（主として断熱改修、台所改善など）として進められてきました。昭和30年の道内の住宅総数は約77万戸で、板張り外壁が約66%、マサ葺屋根が54%を占めていました。このため暖房燃料が浪費され、雪氷害による破損、腐朽が早く、また火災もひんぱんに発生していました。この頃の道住宅年報には「衣、食の好転に引き替え、住宅の問題が依然として深刻で、住宅の量的

不足は、いまなお10万戸を下らない」と記されています。昭和28年には住宅の不燃化と木材資源保護のため「北海道防寒住宅建設等促進法・（寒住法と略称）」が制定され、住宅金融公庫融資対象がブロック構造に制限されたため、以後の北海道の住宅建設では住宅供給公社の住宅（低れんな工事費、単純な平面型をもった三角屋根住宅の普及）を中心としてブロックの利用が促進されました。

昭和30年代の後半になり、それまで住宅の断熱にはおがくずやもみがらなどが用いられていましたが、グラスウール、発泡スチロール等の断熱材の開発が進み、木造住宅でもかなりの保温性が得られるようになりました。また、外壁のモルタル塗りの普及によって防火性能も一段と向上しました。

昭和40年代に入り木造の防寒施工法が一般的になったことから、同44年には寒住法の一部改正により住宅金融公庫融資対象が木造住宅にも適用されることとなりました。更にこの頃から本州メーカーなどの進出によってプレハブ住宅の供給もみられるようになりました。

また、住宅の外観も昭和40年代に入り建材の豊富な供給によって多様化してきました。在来工法の木造住宅、火山灰ブロックやセラミックなどの組積造、木質、鉄骨系のプレハブ造などがあり、屋根の勾配も様々でした。

昭和48年は世界中にオイルショックの風が吹き荒れ、省エネルギー機運が一挙に高まり、住宅の資材不足とともに高断熱化への技術対応がせまられました。宅地や建設資材の高騰も記憶に新しいと

表1 寒地住宅の推移

年代	昭和	30	35	40	45	50	55	60	平成1	
	戦争復興期	高度経済成長期	低成長期	低成長期	低成長期	低成長期	低成長期	低成長期	低成長期	
主な出来事	<ul style="list-style-type: none"> 朝鮮動乱 十勝沖地震 	<ul style="list-style-type: none"> 神武景気 岩戸景気所得倍増 東京五輪 	<ul style="list-style-type: none"> GNP第2位 十勝沖地震 	<ul style="list-style-type: none"> 田変相奨励制 オイルショック 高齢化社会 パイオハイテク 宮城県沖地震 根室半島地震 浦河沖地震 	<ul style="list-style-type: none"> 円高ドル安 	<ul style="list-style-type: none"> 円高ドル安 	<ul style="list-style-type: none"> 円高ドル安 	<ul style="list-style-type: none"> 円高ドル安 	<ul style="list-style-type: none"> 円高ドル安 	
住宅政策	<ul style="list-style-type: none"> 住生活改善事業(間取り・台所・トイレ) 	<ul style="list-style-type: none"> 絶対数不足(最小限住宅) 建材設備の多様化 	<ul style="list-style-type: none"> 第I期住宅建設五ヶ年計画(一世帯一住居) 工業化住宅 	<ul style="list-style-type: none"> 第II期住宅建設五ヶ年計画(一人一室) モダンリビング B.L 	<ul style="list-style-type: none"> 第III期住宅建設五ヶ年計画(最低居住水準(平均居住水準)) ローカリゼーション 	<ul style="list-style-type: none"> 第IV期住宅建設五ヶ年計画(住環境水準) 地域に根ざした住まいづくり HOP計画 	<ul style="list-style-type: none"> 第V期住宅建設五ヶ年計画(居住水準向上) 木造住宅の振興 シムルバーハウジング計画 ウッドタウン計画 	<ul style="list-style-type: none"> 住宅政策 	<ul style="list-style-type: none"> 住宅政策 	<ul style="list-style-type: none"> 住宅政策
寒地住宅の歩み	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅模索 凍上、凍害、結露防止研究 断熱材の模索研究 	<ul style="list-style-type: none"> 防凍住宅の開発 セラミックブロック GWの出現 ハウスメーカー アルミサッシ 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の開発 省エネ住宅 省エネ住宅 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の開発 省エネ住宅 省エネ住宅 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の開発 省エネ住宅 省エネ住宅 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の開発 省エネ住宅 省エネ住宅 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の開発 省エネ住宅 省エネ住宅 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の開発 省エネ住宅 省エネ住宅 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の開発 省エネ住宅 省エネ住宅 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の開発 省エネ住宅 省エネ住宅
主な寒地の変遷と研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ブロック建築指導所設立(S27) 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の生産技術 建築材料の寒冷地適用 カーテンの保温効果 ベチカ、オンドル 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の技術 軽石気泡コンクリート 泥炭地盤 壁面の汚染防止 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の技術 軽石気泡コンクリート 泥炭地盤 壁面の汚染防止 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の技術 軽石気泡コンクリート 泥炭地盤 壁面の汚染防止 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の技術 軽石気泡コンクリート 泥炭地盤 壁面の汚染防止 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の技術 軽石気泡コンクリート 泥炭地盤 壁面の汚染防止 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の技術 軽石気泡コンクリート 泥炭地盤 壁面の汚染防止 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の技術 軽石気泡コンクリート 泥炭地盤 壁面の汚染防止 	<ul style="list-style-type: none"> 防寒住宅の技術 軽石気泡コンクリート 泥炭地盤 壁面の汚染防止
	<ul style="list-style-type: none"> 寒地建築研究所設立(S30.9) 	<ul style="list-style-type: none"> 機構改正により建設部が住宅都市部と改称(S47.4) 	<ul style="list-style-type: none"> 機構改正により建設部と改称(S47.4) 	<ul style="list-style-type: none"> 機構改正により建設部と改称(S47.4) 	<ul style="list-style-type: none"> 機構改正により建設部と改称(S47.4) 	<ul style="list-style-type: none"> 機構改正により建設部と改称(S47.4) 	<ul style="list-style-type: none"> 機構改正により建設部と改称(S47.4) 	<ul style="list-style-type: none"> 機構改正により建設部と改称(S47.4) 	<ul style="list-style-type: none"> 機構改正により建設部と改称(S47.4) 	<ul style="list-style-type: none"> 寒地住宅都市研究所と改称(H1.4)

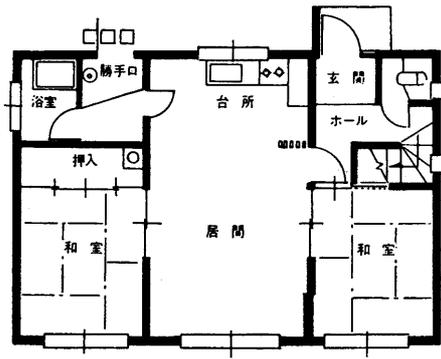


図1 昭和30年代の公社三角屋根住宅。居間を中心に開放した和室が両側にある。2階は小屋裏に収納場所をもった2室が加わる。

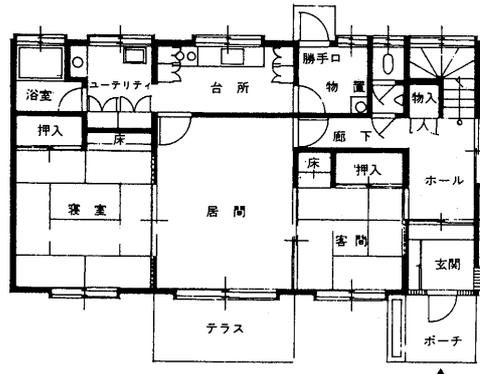


図2 40年代には招き屋根のタイプも多かった。面積が増えたがやはり居間中心で両側に居室のあるタイプが多くみられた。

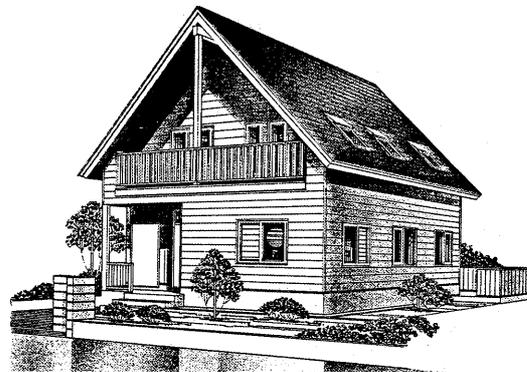
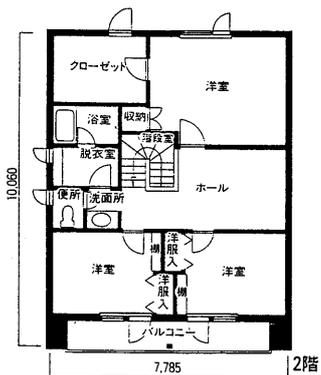
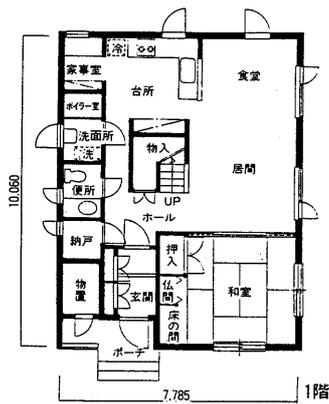


図3 昭和60年代の分譲住宅。Y社のツーバイフォータイプの住宅。居間と食堂が一体の空間。傾斜屋根を十分に使った2階居室、ユニットバスが普及して2階に浴室を設ける例もある。



写真1 昭和30年代には火山灰ブロック造の三角屋根住宅が住宅供給公社によって多く建設され普及した（北見市）。

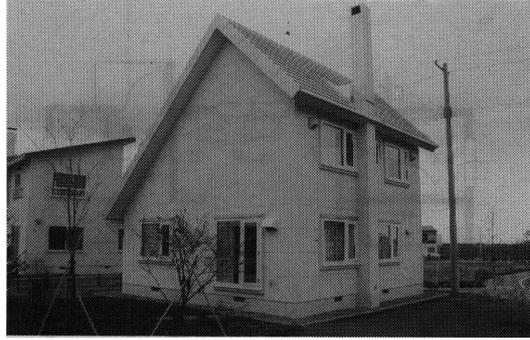


写真2 シンプルな三角屋根、外壁にはALC板を用いている。プラスチック窓も、近年普及している（広島町大曲団地の公社住宅）。

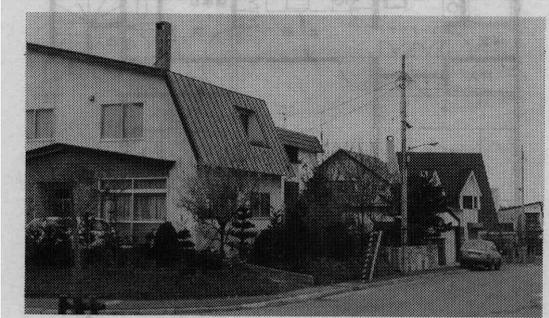


写真3 傾斜屋根、無落雪屋根、古い団地で増改築が始まり、家並みに統一感がなくなる。景観を考えた家並みも大きな課題となっている（広島町北広島団地）。



写真4 最近では火山灰ブロックによる外断熱二重壁（中間に断熱材を入れ、室内ではブロックの蓄熱を利用する）が試みられている（芽室町）。

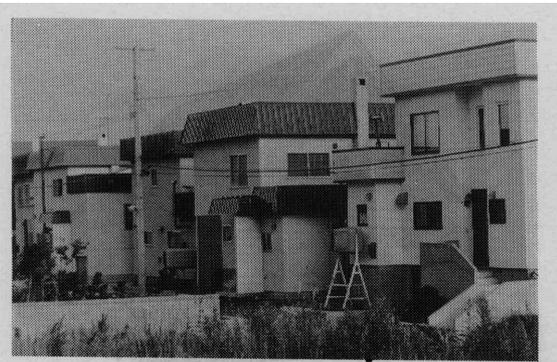


写真5 60年代には宅地の狭小化によって無落雪屋根が普及し家並みが急変した。外装材もモルタル系から乾式工法へと移行、スカイラインはそろったが軒先回りが多様化した（札幌市西区西野地区）。



写真6 外構（門や塀、植栽）などに統一したきまりをもたせ、壁面線などに統一感を出す良好な街並みづくりを目指した住宅群も出てきた（恵庭市恵み野）。

ころです。

住宅の断熱はこれまでの住宅金融公庫による寒住法にもとづいた規準から省エネ規準（昭和55年制定）によるものとなり、更に道の単独の高断熱規準（昭和55年制定）により省エネ化への努力が進められてきています¹⁾。

昭和60年代に入って省エネ化は大きく進展し、「高断熱、高气密」という用語がひんぱんに用いられ始めました。最近では住宅の換気問題やカビ、ダニなど有害生物の発生にも関心が払われています。

一方、これまでの在来工法に各種プレハブ造、組構造、ツーバイフォー工法が加わり住宅の構法、デザイン様式も多様化していますが、家並み、街並みの景観という点からみると雑然とし混乱しているのは否めないところです。しかし、いくつかの団地では外構や樹木、建物の壁面線、屋根勾配などに統一感をもたせる景観に配慮した「街並み手法」も試みられ評価を得ているものもあります。図1～3に間取り、写真1～6に外観の推移を示します。

これからの住まいづくりはどのような方向に向かうのでしょうか。

戦後の良い経済復興の後、30年代の中頃から日本は高度経済成長に入りました。モノのある生活が豊かな生活とされ生活のスタイルは10人1色、自分の家を他人と同じように作りました。その後は自分の好み、感覚に合った快適な生活が求められ、他人より良い家、10人10色の生活スタイルと

なりました。

80年代は個人の生活をベースに安らぎのある人間共感の住宅、モノと心のバランスのとれた自分を生かす家が求められるようになりました。単なる消費者から生活者となりそして生活創造者（ライフクリエイター）としての個人像が求められているのが今日までの流れです²⁾。

今後の生活の力点は充足された衣や食から住へと移っていき、その住生活も単なる食べる、寝る空間からゆとりや豊かさを楽しむや遊びも加えたより個性的なものになっていくことが予測されています。

3 住まいへのニーズ

先頃、当所で道民3,000世帯を対象に「これからの住まい」に関する意向調査を行いました³⁾。

生活の基本である「衣、食、住」について今一番の関心は「住」で54.7%、「食」34.8%、「衣」10.5%の順でした。ちなみに20年ほど前の道のモニター調査⁴⁾では「住」と「食」がほぼ同数でそれぞれ40%、39%、次いで「衣」3%、「どうとも言えない」が18%でした。

また「豊かさ」についての設問では「家族との団らんができること」と考えている人が圧倒的に多く、次いで「親しい仲間が集まる場所がある」ことです。また「部屋とか廊下などに空間的なゆとり、あるいは「家族と団らんができる」ことと裏ほらに「一人きりで充実した時間を過ごせる」などの要望もあります（図4）。

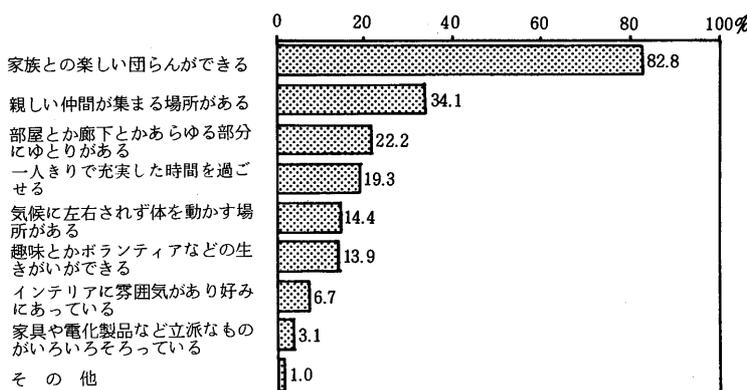


図4 豊かさ

ところで、調査結果からは外れますが、居間と団らんについて考えてみます。

住まいの中心は居間、そこは家族がなどやかに団らんする場です。孫がおじいちゃんの柏手になり、話がはずむ・・・といった光景は写真や何かでおなじみですが現実には？

父親は勤め帰りが遅く、子供は学齢期になると習い事や塾通いで結構忙しく、受験期にもなると勉強部屋にとじ込み気味になります。主婦もパートや何かで疲れきって帰宅し、そそくさと台所に立ち・所在なく居る同居の親も仲々家族にとけ込めない。お互いに夫々のストレスがたまり、ある時には爆発したりします。暮らし・生活にゆとりを求める希望と裏はらに実際の生活スタイルは様々です。

本道の一般的な住宅の間取りは先にも示したように居間が広くとられ長い冬の生活はここが中心となります。家族と一緒にテレビを見たり、新聞や雑誌を広げ、かたわらで主婦が手芸をしたり、アイロンがけをしたりします。訪問客の応接も居間で行います。隣の部屋に居る老親にもほどほどの音が伝わり、家族の中に居ることの安心感を与えます。

最近の間取りは居間と台所が一体化してより広い空間が好まれています。主婦は食事の後片付けをしながら、居間の団らんにも加わることができます。先にも述べたように最近では外で働く主婦が増えています。仕事だけでなく余暇時間を利用し、ボランティアや趣味の集まり、カルチャー教室などにも時間をとっています。「家事に費やす時間」もNHKの生活時間調査などでみると少なくなっています。このため電化製品を中心に料理や後片付けなどが簡素化され、住宅の空間作りにも影響してきています。

例えば主婦の就業の増加によって昼間しめ切られたままの住宅が増え、掃除なども短時間で済ませてしまいます。住宅の管理、維持に細かく目が行き届かないのもやむを得ないことでしょう。よどれにくい仕上材、掃除し易い仕上げ、ディテールなどが求められます。高断熱、高气密住宅が普

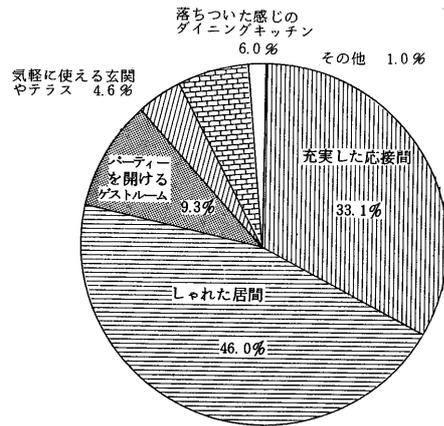


図5 接客空間希望

及してくるとよごれにもなう臭いなどにも気を配らねばなりません。

家族だけの団らんに加えて、親しい仲間の集まれる場所、応接間の需要も高まってきます。余暇時間の充実から家庭へ他人を迎えてのホームパーティーなどが増えるかもしれません。感じの良い居間につづいて充実した応接空間の希望などもより多くなっていくことと思われます(図5)。

住宅内外のデザイン指向はどうなっているのでしょうか。同じ調査例からみると、外観については「白など淡い色合いでシンプルなもの」が世代を問わず約半数の希望、「木のもつ色、材質感を感じさせるもの」が良いとする意向は高齢者ほど強く・逆に「色づかい、形の調和など細かい配慮でしゅれたもの」は若い世代により強い希望となっています。

室内についての好みでは「木のもつ色、材質感を感じさせる自然なもの」が世代によって40%から50%の幅にバラツキ、次いで「色づかい、形の調和など細かい配慮でしゅれたもの」がやはり20~30%までとなっていました。建築の経過年数で見ると10年前に建てられたものでは「木のもつ色・材質感・・・」が重視され、近年の建築のものでは「白など淡い色合い・・・」が重視され全体として「シンプル指向」が強まっていると言えるでしょうか。

4 耐久性と住まい

住宅が質的にも向上して、耐久性も高まってきました。一般的に住まいは一生に一度の大きな買物とされています。近年は多様な住み方を反映してある時期から、より便利でふさわしい立場の住宅に移り住む傾向もみられますが、その場合でも住宅が資産価値の高い耐久性、耐用性を備えているものでなくてはなりません。

住まいへの期待は求めてから少なくとも自分が一生住めることを望む人が多く、取得年齢からみてほぼそれは30～40年（70%余り）でしょう。50年以上を期待するのも調査では15%余りみられます。この場合、子供の成長や独立などライフサイクルの大きな変化のために、ある場合は二世帯同居への増改築などにも対応出来るようなものとしておくといった希望もみられます（図6～7）。

住宅に望む地域的な配慮もまた重要です。雪や風、日照、塩害などの対策を要望し、住宅建設の際の配慮項目として挙げられている実際の数値も

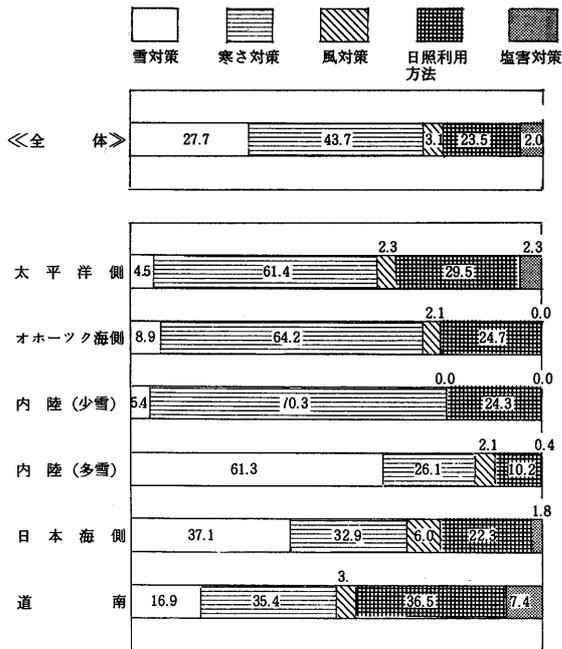


図8 地域別気候配慮

回答者の地域条件を反映した予想された結果でした。全道的には気候条件で最も重要視しているのは「寒さ対策」43.7%、「雪対策」27.7%、「日照利用」23.5%の順でした（図8）。

したがってもう一度現在地で住まいを建築するとした場合の重視項目としては「断熱効果」37.7%、「暖房方法」32.4%、「窓の気密化」24.5%といずれも高い数値を示していました（図9）。

生活上の配慮で空間的に考えておきたいものとしては「広い居間」52.1%、「地下室」が41.0%と高く、「食品庫」25.2%と収納空間としての用途が割合多くみられます。

5 住まいづくりと情報

住まいに関する情報が豊富に得られるようになりました。新聞や雑誌、新聞とともに家庭に入ってくる分譲広告、ダイレクトメール、住宅の展示場も各所でモデル住宅を競ってみせています。今回の調査で、これらの住情報がどのように利用されているのかを聞いてみました。

最近建てられたグループでは「モデルハウスの

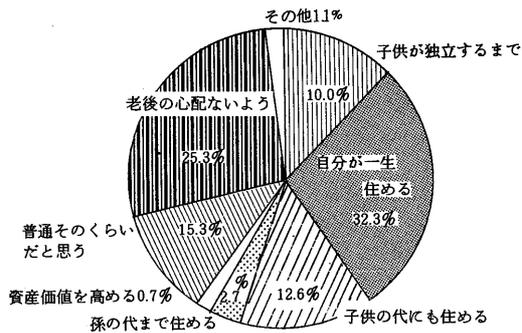


図6 耐久性要求理由

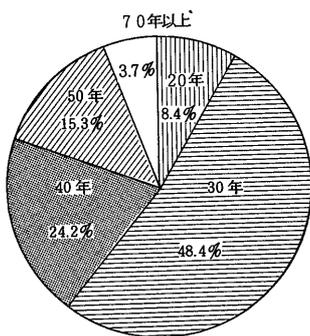
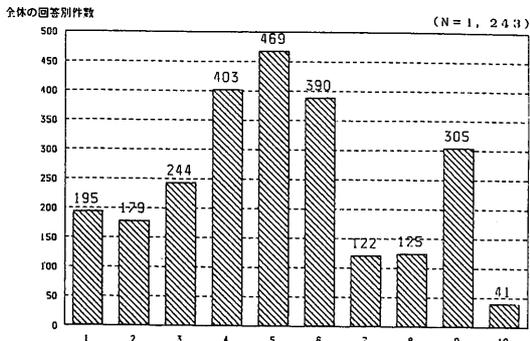


図7 希望耐久年数

6 今お住まいの地域で住宅を建てるとしたら、どんなことを配慮したいと考えますか
 建物に対して配慮したい事を2つまで選んでください
 1) 融雪設備 2) 1階の床高 3) 除排雪スペース
 4) 暖房方法 5) 断熱効果 6) 自然光取入れ
 7) 太陽熱利用 8) 換気システム 9) 窓の気密化・断熱化
 10) 塀・植樹による防風



建設年別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1年前	14.7	14.5	20.6	25.8	39.0	31.9	9.4	13.4	24.6	5.0
10年前	16.8	13.8	18.1	39.1	37.0	30.9	10.4	7.0	24.4	1.5

気候区別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
道南	11.6	15.3	11.1	33.9	32.3	41.3	10.1	12.2	26.5	4.8
日本海側	24.1	16.3	23.4	28.4	35.8	31.6	9.2	8.5	19.5	2.5
内陸(多雪)	27.4	20.7	38.9	24.6	33.0	21.8	7.0	6.7	16.5	2.8
内陸(少雪)	4.1	5.5	6.8	41.1	47.9	34.2	9.6	19.2	30.1	1.4
オホーツク海側	7.3	12.0	13.1	40.3	42.4	28.8	14.1	8.4	29.3	3.7
太平洋側	4.5	7.7	6.8	36.8	44.1	36.4	10.0	13.2	33.6	4.1

図9 建替時の重視項目

見学」60.8%、「住宅メーカー、工務店から直接」57.2%と多く、次いで「住宅雑誌」でした。10年ほど前にたてられたグループでは「家を建てた友人、知人」66.8%、「住宅メーカー、工務店」54.5%で、次いで「住宅雑誌」、「モデルハウスの見学」でした。都市部では「モデルハウス展示場」の役割が大きく、郡部では「住宅雑誌」、「住宅メーカー」、「友人、知人」などとなっています。その他「住宅セミナー」、「住宅相談」などは都市部で多く行われているので、住情報の地域較差の解消なども今後の課題となるでしょう。

6 北方型住宅推進事業について

北海道新長期総合計画では「安らぎとゆとりある生活」を目指して「北方型住宅」の実現を目標として定めています。このために昭和63年度に産・

学・官からなる「北方型住宅推進会議」を設置し「北方型住宅」の設計指針、技術指針の作成、建設促進を計ることとしています。事業全体の流れは表2のとおりです。

初年度は、北方型住宅の目標像を設定し「北方型住宅を創る(らしさ、ゆたかさ、たたずまい)」としてその中間報告をしています。また、平成元年度には普及促進方策を提案するほか、新しい認定制度のための技術規準の作成、設計コンペの実施、B I S制度⁵⁾、ハウスメーカー団体組織化支援など様々な事業が計画されています。今後は具体的な北方型住宅の全道展開が検討されています。旭川市におけるウッドタウン構想もこの事業の一部に位置付けられています。

7 むすび

北方型住宅の目指す目標となる概念は次のように考えられます。

イ) 四季を通して快適な住まい

寒冷な冬、雪に埋もれてしまう積雪期にも、緑豊かな春、夏、秋にも一年を通して内外を問わず快適な環境と空間が得られること。

ロ) 人と地域に根ざす住まい

計画から生産、供給まで人を重視し、それぞれの地域の特性に配慮すること、生活に視点をいたしたものであること。

ハ) 安心して暮らせる住まい

住宅の内外において災害の防止、安全な住まいであること、またそれぞれが地域のコミュニティづくりの一つとしても関わること。

ニ) 将来に残せる住まい

良質な社会資産となること、飽きのこない住宅デザイン・二世帯、三世帯にわたって住みつがれていくものであること。またそれぞれが良好な住環境の育成につながるものであること。

ホ) 印象深い街となる住まい

地域性を生かし、緑豊かな、表情のある住宅や住環境を形成出来るもの。個性の活かせる住まいと街であること。

ヘ) 生活の変化に対応する住まい

表2 北方型住宅推進事業の概要

1. 北方型住宅の目指す方向
 - ※ 21世紀にむけた北海道らしい質の高い総合的な住まいづくり
 - ※ 寒地住宅の建築技術を基盤とし、本道の気候風土に適した性能設備を有し、四季を通して快適な生活を営み、地域にふさわしい生活様式を取込み、街並等にも配慮した住宅
2. 北方型住宅推進事業の目的

北方型住宅の開発普及を総合的に推進することにより、本道の居住水準の向上、良質な住宅ストックの形成を図り、北方の風土に根ざした住文化の創造を進める。
3. 北方型住宅推進事業の施策展開

市町村、関係機関との連携のもと、総合的に施策展開を進める。

区分	事業手法	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度	
北方型住宅の開発普及	北方型住宅推進会議の設立、同会議での検討	<ul style="list-style-type: none"> ・北方型住宅の目標像の検討（中間報告—北方型住宅を創る） 	<ul style="list-style-type: none"> ・設計指針案の中間報告 ・普及方策の検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・設計指針の策定 ・普及方策の提案 	<ul style="list-style-type: none"> ・北方型住宅の建設、普及 設計指針の普及 認定制度の導入 融資制度の拡充 	
		<ul style="list-style-type: none"> ・北海道立寒地住宅都市研究所の調査研究 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別研究の実施（道民意向調査等） 	<ul style="list-style-type: none"> ・指針策定にむけて特別研究の実施 ・民間企業等との共同研究の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・同左 ・同左 	<ul style="list-style-type: none"> ・住意識の啓発 ・モデル住宅、モデル団地建設促進
		<ul style="list-style-type: none"> ・その他関連事項 	<ul style="list-style-type: none"> ・道融資制度の拡充（集中暖房、集中換気設備、木製サッシ増設） 	<ul style="list-style-type: none"> ・融資制度拡充検討 ・技術規程の策定（建築指導センター委託） 	<ul style="list-style-type: none"> ・同左 ・同左 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住宅計画推進
関連事業の推進	普及啓発事業の実施	<ul style="list-style-type: none"> ・シンポジウムの開催 ・設計競技、作文コンクールの実施（マイディアコンペ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・設計競技の実施（モデル開発コンペ） 	<ul style="list-style-type: none"> ・設計競技の実施（地域展開コンペ） ・住宅フェスティバルの開催 		
		<ul style="list-style-type: none"> ・断熱施工技術者の育成 	<ul style="list-style-type: none"> ・B I S 認定事業（試行） 	<ul style="list-style-type: none"> ・同左 	<ul style="list-style-type: none"> ・B I S 認定事業（全道的実施、普及） 	
	ウットダウンプロジェクトの推進	—	<ul style="list-style-type: none"> ・ウットダウン構想策定（道央道北地域）、指定 	<ul style="list-style-type: none"> ・同左構想策定（その他地域）、指定 		

人や家族の変化や社会の変化に対応し、フレキシビリティのあるもの、そのための計画と供給が裏付けられること。様々な生活スタイルに合った住まいの形態。

これがこれからの本道のすすむべき住宅像としてイメージされます。

なお、本稿は日本木材学会北海道支部第20回研究会（平成元年7月）「木と住まい」にて講演した概要の紹介です。

注

- 1) このことについては「住宅の性能」林産試だより1989.2に魚住麗子氏が要約を述べて

おられる。

- 2) 広告に見る住情報のトレンド 電通 山中武彦 住宅金融月報1987.2
- 3) 住宅に関する道民意向調査報告書 平成元年7月 北海道立住宅都市研究所 道内6市13町村3,000世帯抽出1,248世帯（41.6%の回収率）による回答があった。
- 4) 道政についての世論調査「住宅」 昭和43年4月 北海道
- 5) BETTER INSULATION SPECIALIST断熱施工の専門家）として資格を与える。